

農業と科学

1988
5

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO LTD

果菜類の栽培と ロング肥料の使用について

広島県立農業試験場島しょ部支場

主任研究員 後 俊孝

1. はじめに

果菜類は概ね長期間にわたって栽培されるため、数回の追肥が行われるのが普通である。しかし、作物の茎葉が繁茂している場合や、マルチ栽培などでは、この作業は可成り煩雑である。さらに、収穫最盛期ともなれば、労力的に適期追肥ができにくいこともあり、作業の省力化が望まれている。

追肥の方法としては、液肥を用い灌水と同時に施肥すれば、労力的にはかなり節減される。しかし、広島県南部の新興園芸地帯では、簡易なパイプハウスであり、この様なハウスでは液肥施用施設が設置されていない。

この対策としては、施肥全量を基肥として施用する方法が考えられる。しかし、普通化成では一度に多量施肥すれば、窒素の一時的な多量生成により、土壌が高塩類濃度状態となり、作物の生育不良あるいは枯死を惹起する可能性が高い。また逆に、施肥量が少ない場合は、生育後期の肥料切れによる収量低下は免れない。

そこで、窒素の生成が長期間にわたって除々に行われる緩効性肥料としてロング肥料が開発されたので、このロング肥料を用いた全量基肥による、果菜類の長期栽培の可能性について検討した。さらに、花こう岩風化土壌畑における、緩効性肥料の窒素発現の傾向を把握するための室内試験も併せて行ったので、その結果を述べる。

2. 畑土壌における窒素生成と野菜の収量

1) 試験の方法

試験は広島県因島市の広島県立農試島しょ部支場で行った。供試は場の土壌は、花こう岩系の風化土壌(中粗

粒褐色森林土)で、土性はL Sである。供試作物はキュウリ、ピーマン、トマト、エンドウである。試験は、間口5.4mのパイプハウスで行った。

供試肥料は、ロング(13-3-11)の100, 140, 180の3タイプで、対照として住友の組合液肥2号(10-4-8)を用いた液肥区を設けた。

施肥量は第1表のとおりとし、半促成キュウリ及び早熟ピーマンでは、施肥量の80%をロング、20%をスターターとして複合燐加安(14-10-13)で施用し、ロングの窒素利用率は80%として計算した。抑制キヌサヤエンドウでは、播種前のECの調査結果から残存窒素量を8mg/100gとみなし、残りをロングで窒素利用率80%として施用した。また、抑制トマトは、ロングの窒素利用率を100%として施用した。

いずれの作物も窒素量を基準とし、リン酸、カリにつ

第1表 試験の種類別施肥量

試験区	半促成キュウリ			抑制トマト			早熟ピーマン			抑制キヌサヤエンドウ		
	N	P	K	N	P	K	N	P	K	N	P	K
対照(液肥)	30.0	12.0	24.0	10.0	4.0	8.0	28.0	11.2	22.4	18.0	7.2	14.4
ロング100タイプ	36.0 (6.0)	11.2 (4.3)	31.0 (5.6)	10.0	2.3	8.5	33.6 (5.6)	10.5 (4.0)	28.9 (5.2)	12.5	2.9	10.6
ロング140タイプ	36.0 (6.0)	11.2 (4.3)	31.0 (5.6)	10.0	2.3	8.5	33.6 (5.6)	10.5 (4.0)	28.9 (5.2)	12.5	2.9	10.6
ロング180タイプ	36.0 (6.0)	11.2 (4.3)	31.0 (5.6)	10.0	2.3	8.5	33.6 (5.6)	10.5 (4.0)	28.9 (5.2)	12.5	2.9	10.6

注：()内は複合燐加安による施肥成分量

本号の内容

§ 果菜類の栽培と
ロング肥料の使用について……………(1)

広島県立農業試験場島しょ部支場

主任研究員 後 俊孝

§ ロングの
いちご栽培での利用……………(7)

埼玉県経済連

技術参事 石居企救男

いては考慮しなかった。ロング及び燐加安は、いずれも施肥全量を基肥とし、液肥区は、灌水時に500倍で適宜施用した。

2) 結果及び考察

(1) 無機態窒素の生成

半促成キュウリのロング区において、施肥後39日目の4月20日には、18~36mg(対風乾土100g以下同じ)の無機態窒素の生成が認められた。その後、ロングのいずれのタイプも生成量が低下し、施肥後63日目にあたる5月14日の調査では、4~7mgと非常に少なくなった。

第2表 無機態窒素の生成量(半促成キュウリ)

試 験 区	無 機 態 窒 素 (mg/100g)						
	4月20日	5月1日	5月14日	5月31日	6月19日	7月3日	7月13日
対照(液肥)	5.09	4.49	2.60	4.74	5.09	1.13	0.80
ロング100タイプ	35.59	18.22	7.08	4.57	13.99	12.74	3.30
ロング140タイプ	32.90	26.56	5.43	9.88	34.66	6.34	5.50
ロング180タイプ	17.71	12.09	4.23	12.56	18.42	20.86	5.80

これは、スターターとして施用した燐加安の窒素が初期に生成され、以後減少したためと考えられる。しかし燐加安による施用窒素量は、10a当たり6kgと少ないことや、後述の室内試験の結果から考えると、ロングの無機態窒素生成が、燐加安のそれに比べてもそれ程遅くないことから、ロングによる初期の窒素生成もあったものとみられる。また、土壌中の無機態窒素量の低下は、この時期にキュウリの生育が旺盛となり、果実の収穫量も増加していることから、窒素吸収量が急激に増加して土壌中の窒素濃度が一時的に低下したことによるのではないかと考える。

抑制トマトにおける無機態窒素生成量の推移は、10月上旬まではロングのタイプに関係なく漸増の傾向を示した。その後、100タイプでは10月下旬までほとんど変化なく、以降低下した。140タイプでは、10月下旬と11月下旬に、180タイプでは11月上旬を中心に生成量が多くなるなど、一定の傾向は認められなかった。

早熟ピーマン栽培期間中の土壌中の無機態窒素生成量は、施肥後39日目の調査開始時より経時的に増加し、施肥後131日目にあたる収穫終了時(7月21日)の調査で低下した。窒素の生成傾向は、140タイプ区で施肥後99日

にあたる6月19日の調査時にやや低かった以外は、タイプによる差はみられなかった。

抑制キヌサヤエンドウにおける無機態窒素の生成量は生育前期の9月下旬から10月上旬にかけて高く、以降、低下の傾向にあった。とくに、ロング180タイプ区は、10月下旬から他の2区よりかなり少なくなった。また、いずれのタイプでも、1月から2月にかけて再び生成量が増加しており、施肥後200日を越えた3月23日の調査でも、10mg以上の生成量が認められている。

抑制キヌサヤエンドウにおけるこのような無機態窒素の生成量の消長は、温度(地温)によるところが大きいと考えられるが、同時にロングの肥効期間が非常に長いことを現わしている。

無機態窒素の各調査時点の生成量を積算しその傾向をみると、半促成キュウリでは、140タイプ区が常に多く、ついで100タイプ区で、180タイプ区

が最も少なかった。抑制トマトでは、180タイプ区が初期より多い状態を経過した。これに対して、140タイプ区は10月上旬までは180タイプ区よりやや少なかったが、以降はこれと同程度となった。また、100タイプ区

第3表 無機態窒素の生成量(抑制トマト)

試 験 区	無 機 態 窒 素 (mg/100g)								
	8月28日	9月11日	9月25日	10月9日	10月23日	11月5日	11月20日	12月3日	12月18日
対照(液肥)	14.70	9.61	6.13	9.51	6.75	7.54	6.68	5.02	0.73
ロング100タイプ	13.03	9.82	16.90	21.62	18.77	17.07	21.55	12.90	9.35
ロング140タイプ	14.76	10.97	15.27	20.65	27.60	19.31	27.74	19.72	8.80
ロング180タイプ	18.01	16.59	17.31	18.74	21.78	29.37	15.56	10.76	9.07

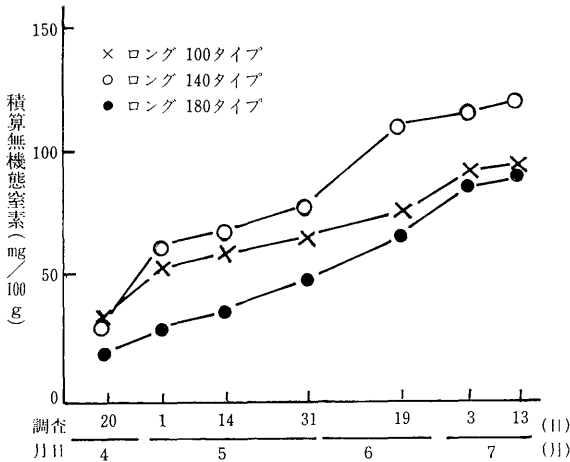
第4表 無機態窒素の生成量(早熟ピーマン)

試 験 区	無 機 態 窒 素 (mg/100g)					
	4月20日	5月1日	5月31日	6月19日	7月3日	7月21日
対照(液肥)	2.84	3.27	5.31	5.02	4.43	5.96
ロング100タイプ	14.97	16.72	13.31	13.54	23.67	38.72
ロング140タイプ	12.26	16.65	13.97	13.99	12.87	35.68
ロング180タイプ	9.84	10.70	9.52	11.51	17.72	33.57

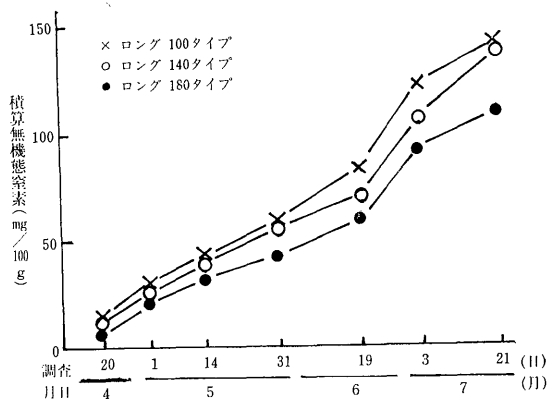
第5表 無機態窒素の生成量(抑制キヌサヤエンドウ)

試 験 区	無 機 態 窒 素 (mg/100g)							
	9月7日	9月21日	10月20日	11月17日	12月18日	1月14日	2月18日	3月23日
対照(液肥)	7.75	10.49	6.45	6.78	6.02	4.50	5.85	4.29
ロング100タイプ	15.13	29.61	26.91	21.30	18.03	7.97	12.78	11.51
ロング140タイプ	17.98	16.79	19.19	18.84	21.98	17.44	13.12	12.52
ロング180タイプ	19.53	19.88	16.01	10.19	10.37	7.03	10.81	11.27

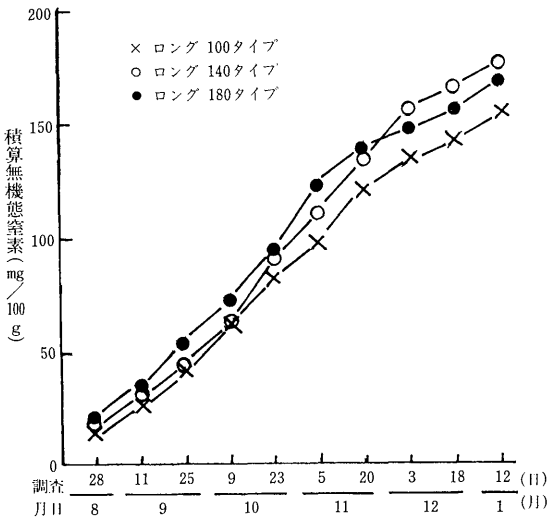
第1図 積算無機態窒素(半促成キュウリ)



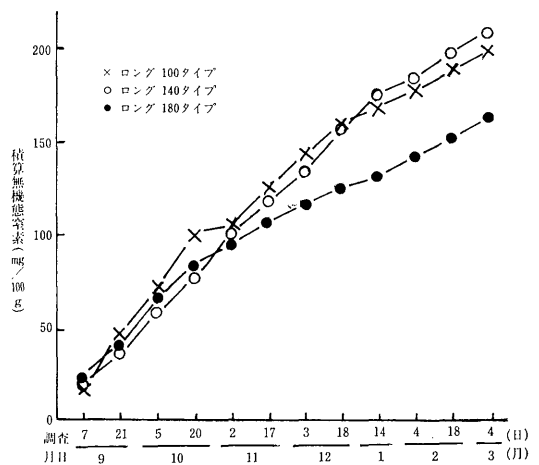
第3図 積算無機態窒素(早熟ピーマン)



第2図 積算無機態窒素(抑制トマト)



第4図 積算無機態窒素(抑制キヌサヤエンドウ)



では、他の2タイプ区よりやや少なかった。早熟ピーマンでは100タイプ区で最も多く、140タイプ区より15mg程度少なかった。また、180タイプ区は、常に他の2区より少なく推移した。抑制キヌサヤエンドウでは、100タイプ区が12月上旬まで最も多かったが、以降は140タイプ区で多くなった。また、180タイプ区は、10月中旬までは140タイプ区より多かったが、その後は最も少なく経過した。

(2) 土壌のEC及びPH (H₂O)

各作物の栽培試験におけるロング施用後の、土壌のECと無機態窒素との相関を第6表に示した。

土壌のECは、土壌中の無機態窒素及び硝酸態窒素と極めて高い相関がある。このことは、ロングのような緩効性肥料を用いた場合でも、ECの測定

により土壌中の無機態窒素含量を推定できることを表わしている。

半促成キュウリ、早熟ピーマン、抑制キヌサヤエンドウは、ほぼ同じ相関係数を示したのに対し、抑制トマトでは、これらに比べて小さい係数となった。この理由は明らかではない。

土壌PH (H₂O) は、対照(液肥)区に比べて、ロング区がいずれも0.5前後低く推移し、ロングのタイプ間に差はみられなかった。これは、対照区よりロング区の土壌中の硝酸態窒素が常に多く生成されたことによると考えられる。

第6表 無機態窒素およびECの相関関係式

作 目	相関関係式	r
半促成キュウリ	$y = -2.04 + 39.3x$	0.863**
抑制トマト	$y = 3.27 + 29.2x$	0.639**
早熟ピーマン	$y = -1.46 + 39.2x$	0.875**
抑制キヌサヤエンドウ	$y = 0.97 + 42.5x$	0.894**

注: y=無機態窒素含量(mg/100g), x=EC (mS/cm)

第7表 土壌のPH (早熟ピーマン)

試験区	無機態窒素 (mg/100g)						
	4月20日	5月1日	5月14日	5月31日	6月19日	7月3日	7月21日
対照 (液肥)	6.7	6.8	6.3	6.6	6.5	6.6	6.3
ロング100タイプ	6.5	6.3	6.4	6.6	6.0	5.9	5.9
ロング140タイプ	6.5	6.4	6.2	6.4	6.1	6.1	6.0
ロング180タイプ	6.4	6.4	6.3	6.4	6.1	6.2	6.0

(3) 収量

半促成キュウリの総収量は、対照(液肥)区が最も多く、ロング区は対照区の8~13%低収となった。ロング区では、140タイプ区が最も低収となったが、有意な差は認められなかった。また、ロング区の対照区に対する

第8表 収量調査

試験区	半促成キュウリ		抑制トマト		早熟ピーマン		抑制キヌサヤエンドウ	
	収量 (kg/a)	対照区比 (%)	収量 (kg/a)	対照区比 (%)	収量 (kg/10a)	対照区比 (%)	収量 (kg/10a)	対照区比 (%)
対照 (液肥)	1,714	100	974	100	6,459	100	1,170	100
ロング100タイプ	1,574	92	919	94	6,068	94	1,406	111
ロング140タイプ	1,490	87	1,003	103	6,012	93	1,384	109
ロング180タイプ	1,600	93	966	99	5,641	87	1,281	101

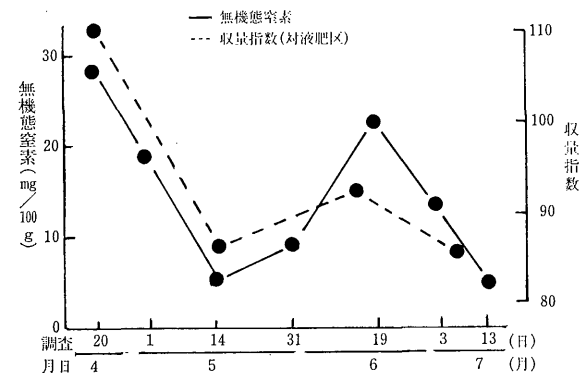
月別収量の割合をみると、4月は高く、5月には低くなっている。そして、6月もやや低く、7月には再び可成り低くなった。

この傾向は第5図に示すように、無機態窒素の生成消費と類似しており、キュウリでは生育の盛んな時期の窒素吸収量が多いため、高収量を得るには一定の窒素レベルでの管理が必要と思われる。

抑制トマトの140及び180タイプ区の総収量は、対照(液肥)区に比べて同じかやや高かったが、100タイプ区では、6%程度低かった。

早熟ピーマンでは、対照(液肥)区に対して、ロング

第5図 無機態窒素量と収量指数(半促成キュウリ)



100及び140タイプ区は7%, 180タイプ区は13%の低収となった。しかし、タイプ間の収量に有意な差はみられなかった。

抑制キヌサヤエンドウの収量は、ロング100タイプ区が11%, 140タイプ区が9%, 180タイプ区が1%, それぞれ対照区より増収した。そして、溶出

期間の短いタイプほど多収の傾向にあった。

このように、対照(液肥)区に対するロング区の収量は、抑制のキヌサヤエンドウでは高く、抑制トマトでもほぼ同程度であったが、半促成キュウリや早熟ピーマンでは低かった。また、抑制キヌサヤエンドウでは、播種前に土壌のECにより残存窒素量を推定し、施肥量を減らしたが、正常な生育をするのに必要な窒素量は生成されたものと思われる。

3. 緩効性肥料の種類と無機態窒素の発現

(室内試験)

1) 試験の方法

島しょ部支場内の花こう岩風化土壌を、2mmで篩別し風乾土とし、設定肥料を混ぜて直径8.5cm、高さ4.5cmのポリ容器に入れた。

供試肥料は、ロング100及び180タイプ(13-3-11)並びにIB化成S1号(10-10-10)、対照として複合燐加安14号(14-10-13)を使用し、別に無肥料区も設けた。

施肥量は、窒素成分で乾土100g当たり40gとした。含水率は10%に設定し、1週間毎に秤量して補水し、設定温度を25℃にして、200日間インキュベイトし無機態窒素の発現状況を調査した。なお、緩効性肥料は、測定時には肥料(固型部分)を除去した後、分析に供した。

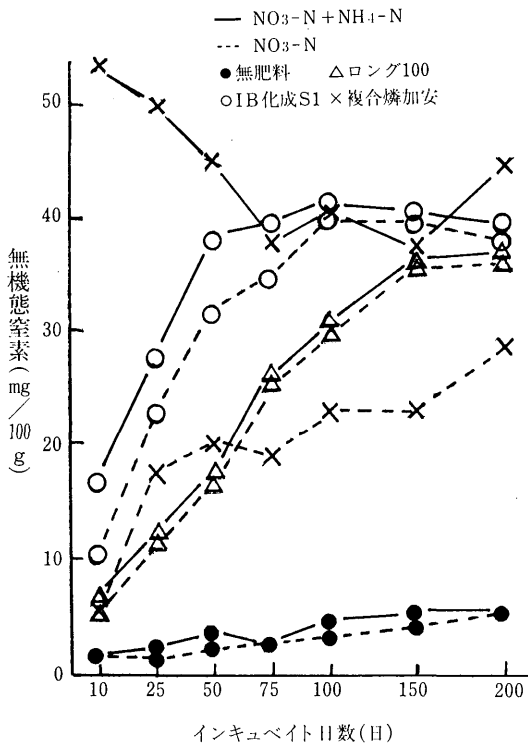
2) 結果及び考察

無機態窒素(NO₃-N+NH₄-N)の発現量は、複合燐加安区を除いて経時的に増加した。また、無肥料区も僅かであるが無機態窒素の発現がみられ、発現量も漸増の傾向を示した。複合燐加安区の無機態窒素発現量は初期から多かったが、これは燐加安肥料を土壤中より除去できなかったため、肥料中の成分も溶出したためと考えられる。

硝酸態窒素の発現量は、各区とも経時的に増加したがIB化成S1区が最も早くからみられ、かつ最も多い状態で推移した。ついで、50日目までは複合燐加安区が、それ以降はロング区がそれぞれ多かった。

ロングのタイプ別に発現量の動きをみると、無機態窒素、硝酸態窒素ともに75日目より200日目まで、100タ

第6図 無機態窒素の発現(室内試験)



イプ区が180タイプ区に比べて3mg前後多かった程度でその差は小さく、ほぼ同じ傾向を示した。

また、ロングの両区及びIB化成S1区の無機態窒素に対する硝酸態窒素の割合(硝化比)は、25日目にはいずれも80%以上を示した。これに対して、複合燐加安区は、75日目で約50%、200日目でも約65%と硝化比が非常に低かった。

これは供試土壌の特性によっておこった現象とみられ、筆者らも他の試験で、本土壌を用いた場合に硝酸化成が非常に遅れる結果を得ている。

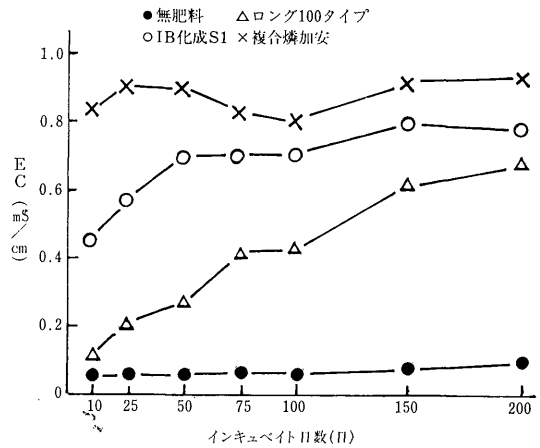
土壌のECの推移は、複合燐加安区が常に0.8以上と最も高く、無肥料区は0.1と低かった。また、IB化成S1区及びロング区は経時的に高くなったが、IB化成S1区がロング区より高く推移した。また、各区にお

第9表 肥料の種類と硝化比(室内試験)

試 験 区	インキュベイト日数 (日)						
	10	25	50	75	100	150	200
ロング100タイプ	88.5	93.8	93.4	98.8	97.8	97.8	99.7
ロング180タイプ	87.5	94.5	95.4	98.2	96.9	97.6	99.3
IB化成S1	60.3	81.8	83.5	87.4	95.2	98.0	95.6
複合燐加安	10.6	34.5	43.7	49.8	56.5	61.6	64.9

注:硝化比(%) = $\text{NO}_3\text{-N} \div (\text{NO}_3\text{-N} + \text{NH}_4\text{-N}) \times 100$

第7図 ECの推移(室内試験)



るECと硝酸態窒素の発現量との間には

ロング両タイプ $Y = 0.569 + 63.1X$ ($\gamma = 0.943^{**}$)

IB化成S1 $Y = -28.3 + 89.5X$ ($\gamma = 0.857^{**}$)

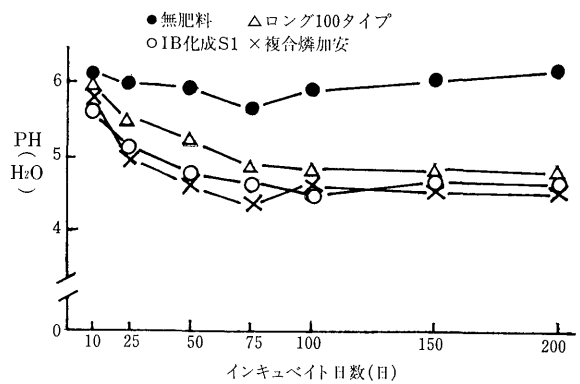
複合燐加安 $Y = 15.3 + 39.9X$ ($\gamma = 0.304$)

$Y = \text{硝酸態窒素 (mg/100g)}$ $X = \text{EC (mS/cm)}$

の関係式が得られ、IB化成S1区とロングの両タイプ区では高い正の相関が認められた。

これによれば、ECが1以下の場合、同じ値であれば土壌の硝酸態窒素含量は、IB化成S1区よりロング区の方が多くなることになる。すなわち、土壌中の硝酸態窒素

第8図 PH (H₂O) の推移(室内試験)



量が同じ場合は、IB化成S1区の方がロング区より高いECになる。

土壌のPH (H₂O)は、無肥料区が常に6以上と高く推移した。これに対して、施肥区では、5日目調査時の5.6~6.0から漸次低くなり、200日目には4.8~4.9となった。

4. おわりに

花こう岩系風化土壌(中粗粒褐色森

林土)において、栽培が長期間に及ぶ果菜類を対象に、ロングを用いた全量基肥栽培の可能性を検討した。

野菜栽培期間中の土壌の無機態窒素生成量は、気温の上昇に伴い多くなる傾向にある。また、野菜の生育も高温期に向って盛んとなり、窒素要求量も多くなるため、高温に伴う窒素生成量の増加は、野菜の生育に適応していると思われる。

しかし、半促成キュウリの試験でみられたように、高温期に向いながらも土壌中での無機態窒素量の低下現象もある。この理由については判然としないが、野菜の生育が急激に進み、それに伴って窒素の要求量が著しく増加することにより、一時的に土壌中の窒素含量が低下するのではないかとと思われる。一方、本試験の範囲では、陽イオン交換容量が6me前後と小さい土壌にもかかわらず、塩類濃度障害が認められていない。上記の結果を勘案した場合、半促成キュウリの生育をより正常に行わしめるためには、もう少し基肥の施用量を増やすのが適当ではないかとも考えられる。

また、無機態窒素量とECとの間には密接な関係があり、施肥量の増加は結果としてECの上昇を誘起する。そして、陽イオン交換容量の小さい土壌では、低いECでも作物の生育障害が発現する。したがって、全量基肥栽培では、同じ窒素生成量でもECの上昇程度の小さい資材が良く、この点でもロング肥料は適しているといえる。さらに、野菜の種類によって耐塩性も異なるため、各野菜に対する全量基肥施用量の上限を検討する必要がある。

ロング肥料のタイプ別に無機態窒素生成量を積算した

値をみると、概して140タイプで多く、180タイプで少ない傾向にあった。また、ロング肥料の窒素生成はかなり長期間にわたり、タイプ間には顕著な差は認められなかった。無機態窒素の生成量及びその傾向は、ロングのタイプによるよりも施肥量や作型の違いによる影響が大きいと思われる。これは、水田土壌と異なり施設畑土壌では、気温や地温あるいは土壌水分など環境条件の変化が激しいためと思われる。

また、ロング肥料の窒素は緩効的に溶出することから、普通化成よりも野菜によく吸収利用され、その窒素利用率は高いとみられる。したがって、施肥量を決める場合、普通化成と同様に考えても問題はないと思われる。さらに、本供試土壌では、硝酸化成が非常に遅いため、硝酸態窒素を好むものが多い野菜の栽培では、ロングのような硝化比の高い肥料が適する。

野菜の収量は、抑制キヌサヤエンドウ、抑制トマトでは液肥区と同等かそれ以上であった。しかし、半促成キュウリや早熟ピーマンでは、液肥区より低くなっている。これは、施肥量や作期の違いによって生じたものと思われ、高温期に向かい生育が旺盛となる作型や種類では、基肥量を更に増やすか、又は液肥による追肥の併用も検討する必要がある。

以上のことから、長期間に及ぶ野菜栽培を行う場合、追肥の省力体系としてのロング肥料を用いた全量基肥栽培は可能であると考えられる。野菜の種類、作型によっては追肥も必要と思われるが、その回数は1~2回程度で良いと思われ、追肥回数の削減効果は明らかにあると思われるので今後はこれらの点についての検討が必要である。

◇ 訂 正 ◇

3月号兼子 明様の掲載中に誤植がありましたので訂正させていただきます。

誤

1 試験の概要

圃場	容積重	pH(H ₂ O)	T-C	T-N	CEC
	g/100cc		%	%	me/100g
A(高収田)	115.0	7.2	1.87	0.15	8.7
B(低収田)	120.0	6.2	1.14	0.10	11.7

1 P右側1行目 2) 試験 I 水稲施用法試験

2 P図-2中 Y=0.12×0.83
Y=0.14×0.79

3 P表-2中区の(棟)

4 P左側上から3行目 第2図とあるのは、
ク 4行目 第2図とあるのは、
ク 7行目 第3図とあるのは、

正

1 試験の概要

圃場	容積重	pH(H ₂ O)	T-C	T-N	CEC
	g/100cc		%	%	me/100g
A(高収田)	115.0	7.2	1.87	0.15	11.7
B(低収田)	120.0	6.2	1.14	0.10	8.7

2) 試験 I 水稲施用法試験

Y=0.12×0.83X
Y=0.14×0.79X

(標)

第3図
第3図
第4図

ロングの いちご栽培での利用

埼玉県経済連

技術参与 石居企救男

1. はじめに

緩効性肥料が売り出されるようになったのは、今からおおよそ40世紀も前のことになるのではあるまいか。肥料が加水分解によって効きめをあらわすとか、いろいろ話があったことを思い出す。緩効性は一時に効果を出さず、少しずつ適度に効きめをあらわすと一般には受けとられたのではなかるか。緩効性肥料は今までになかったものであり、それさえ施しておけば作物はうまく育つと受けとられた。しかし実際は都合よく進むとは限らなかった。

そのころ関東々山地域の県の試験場で野菜についての緩効性肥料についての試験データを集めて、まとめをすることになり、当時埼玉県農試に勤務していた筆者がその集計を担当した。その結果はこれと言った特色が出なかったと記憶している。は種時に緩効性肥料を使用すると、肥やけによる発芽障害は少なかったことは確かであったと思う。

その後、緩効性肥料も使い方がわかって来て使用のめやすが出来、肥料のなかで占める位置も明確になったと考える。

一時、肥料関係の仕事から離れた筆者が、数年前経済連に勤めるようになり、ロングに出会うことになった。ロングは今さら言うまでもなく、温度25℃で、80%のチツツが有効化する日数を示すめやすとして、ロング100とか140とかの記号で緩効性を表示していると言うが、肥料のチラシに書いてあるように都合よく溶出するだろうか会社側に質問したことを覚えている。これがきっかけになって実際の畑で、いわば机上プラン通りの肥効の発現が期待出来るのか実験してみようと言うことになり、埼玉園試のハウスを借用してためしてみることにした。

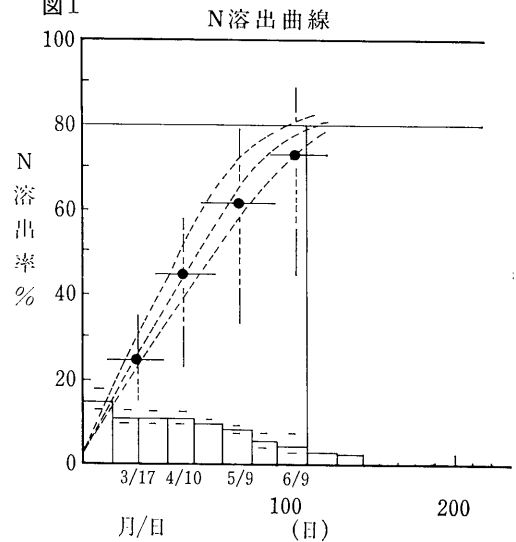
2. ロングの溶出

昭和61年2月以降に実施した試験では次のようになっている。

使用肥料 ロング14—12—14 100タイプ

測定法 ステンレス製網かごに土とロングを混合し土中に埋込み、一定期間ごとにかごを掘出しチツツを分析してその期間の溶出率を求めた。

図I



結果は図Iに示した。三本曲線があるが、中央の線が地温から算出した溶出理論線であり、上の線は2.5℃高いばあい、下の線は逆に2.5℃低いばあいの線であり、黒点で示したのが実測結果である。

この結果からみると、次のようなことが言える。

- (1) ロング100は、はじめの30日でチツツは25%くらい溶出する。全体としては緩効であるので、追肥をはぶくためこの肥料を基肥に利用することは可能と考える。
- (2) 基肥としてはかなり多量のロングを一時に施用しても差し支えない。
- (3) チツツの緩効度も単にながぎきすと言うものでなく、地温データから効き方が前もって予測出来ると考える。
- (4) タイプの選定にあたっては、ロングは地温の影響を受けるので、表示されたロングのタイプ例えば100は、約100回効くと断断せず、現地の地温と作物の栽培期間を調査することが大切である。

3. いちご栽培でのロングの利用

いちご栽培も品種が変わり、早生化して収穫期を早める傾向が強くなっている。これに伴ない施肥もどうするかを取りあげ専用肥料の見直しを行った際ロングを取り入れることにした。

秋定植して2月頃までの無追肥栽培を目標にし、それ以後さらに栽培を続けようと思えば追肥する施肥法にする。早生苺専用(9—9—9)はアンモニア態チツツ、ロング100態、有機態をそれぞれ1/3づつ含み。有機は魚粕、骨粉、カニガラ等動物質を主体に配合した。

特徴として基肥と追肥の成分を受けもつ緩効性ロングも含まれるので追肥の省力化がはかれることを打出した。基肥施用量は今までの基肥と追肥の量を合せた量に

する必要がある。2月以降、草勢をみて追肥が必要になれば液肥で追肥施用することとした。表-2に一例を示す。この考え方で、県内の数普及所で現地園場試験を行っているが、生育状況の一例をあげると次のようであった。

1) 耕種概要

(1) 施肥

定植圃	専用肥料区	元肥専用(9.9.9)	200	24.0	20.4	19.2
		ナタネ粕(5.2.1)	120			
	慣行区*	トモエ化成(8.7.5)	240	25.2	19.2	13.2
		ナタネ粕(5.2.1)	120			

*2月2日 追肥 (12-5-8) 20kg/10a施用

- (2) 親株植付 4月3日 マルチング
- (3) 仮植 7月21日, 23日~25日 18cm×18cm 6条植
- (4) 定植 9月18日~23日 2条高畦 株間18cm
- (5) 保温開始 10月20日
- (6) 電照開始 12月25日
- (7) 出荷始 1月1日

2) 生育状況調査

調査月日 又はステージ	区名	草丈 cm	葉柄長 cm	展開葉数	最大葉 タテ×ヨコcm	クラウン径 mm	葉色 ポイント
61.10.16 保温開始期	元肥専用区	19.8	14.9	3.6	10.1×6.5	12.4	6.2
	慣行区	16.2	11.6	3.4	9.4×7.5	13.3	6.5
				()内新葉		開張	
61.11.7 出蕾期	元肥専用区	18.8	12.6	7.2(4.4)	9.9×7.1	34.0	7.9
	慣行区	16.2	10.8	6.3(3.3)	9.8×6.8	33.8	7.6
61.12.2 開花期	元肥専用区	20.0	18.2	(9.3)			7.0
	慣行区	19.2	17.0	(9.0)			7.0
						開張	
62.2.16 第2花房収穫始	元肥専用区	16~17				38.0	7.0
	慣行区	20~21				43.0	6.0

3) 収穫調査 (伝票と観察)

- ① 出荷始は1月1日、元肥専用区が、やや遅い傾向でスタートしたが、1月中旬から同程度の収穫となる。
- ② 第2花房の収穫、着色の進展は、元肥専用区が早い。

4) 果実の品質調査 (伝票と観察)

- ① 頂花房の上物率(3L~L)は元肥専用区が優る。
- ② 第2花房についても同様の傾向が見られる。
- ③ A及びB級の差は見られない。

※ 草勢状態から見て、2月中旬からの収量品質性は、明らかに元肥専用区が優ると判断される。

新しい元肥専用肥料の成績は良好で、普及性が高いものと判断される。埼玉のいちご栽培は他県同様、高令化してきている。その中で、安心して省力のできるよい肥料が望まれており、新元肥専用肥料は、そのような可能

性を持つ肥料である。

4. おわりに

ロングは新しいタイプの緩効性肥料であることは確かである。この特性を生かした施肥法を組立てて省力化が品質向上の面で野菜の生産に役に立つ場を作り出すことに努力したいものである。

表-1 きゅうり施肥基準例きゅうり専用826号

作型	目標収量	基 肥	追 肥
無 加 温 ハ ウ ス	12 ト ン	完熟堆肥 2,000kg きゅうり専用826号 380kg(19袋)	有機液肥 200kg
		成分 窒素 りん酸 加里 30.4kg 7.6 22.8	窒素 りん酸 加里 20 8 12
		完熟堆肥 2,000kg きゅうり専用826号 380kg(19袋) ロング100 14-12-14 200kg(20袋)	緩効性肥料により追肥の必要性は少ないが草勢がおとろえたら追肥する
		成分 窒素 りん酸 加里 58.4kg 31.6 50.8	

最後に埼玉県のみゅうり施肥基準例を表-1に示す。きゅうりの省力施肥体系の普及拡大を期待するものである。

(注) 執筆者石居先生は昭和63年3月末をもって埼玉県経済連を御退職になりました。(事務局)

表-2

早 生 品 種 栽 培 (女 峰 等)	仮 植 床	元 肥 アサヒエース(15.15.15) 2.5袋(50kg) 合計成分量 N P K 7.5kg 7.5kg 7.5kg
	本 圃	土つくり 完熟堆肥 4,000kg 又はフトール3号 25袋(500kg) 粒状BMようりん 2袋(40kg) 苦土石灰(粒) 4袋(80kg) 元 肥 早生苺専用(9.9.9) 12袋(240kg) 合計成分量 N P K 21.6kg 28.4kg 21.6kg 追 肥 追肥は草勢に応じて1回の施肥量を少なく分施してください。